

入院児とその母親へ手作りのおもちゃを使用した援助効果について —小児看護実習における遊びの援助を通して—

猪 谷 生 美* 増 田 安 代**

要 旨

W病院小児病棟におけるW看護短期大学部3年生の小児看護実習において、受持の子どもに学生の手作りのおもちゃを遊びに活用した主に長期入院の5つの事例を取り上げ、母子への援助効果について検討した。その結果、母子への情緒的な安定を図り、入院生活を楽しく過ごすことができたり、入院児や母親同士の交流の機会にもなっていることがわかった。また、子どもの病院体験のこわさを軽減でき、学習への動機づけや社会との接触・経験をもつ機会となっていることがわかった。

キーワード：手作りおもちゃ 受け持ちの子ども 母親 小児看護実習

はじめに

子どもの入院生活において、治療が優先され、子どもの日常生活である遊びが後回しにされがちな現実がある。鈴木は、「イギリスでは、すべての子どもが遊びを必要としているが、入院している子どもにとってもそれは同じ権利であるとして、NAWCH (National association for the welfare of children in hospital) —入院している子どもを守る協議会は、1984年に入院している子どもの権利に関する十ヶ条憲章を作成した。この中にも子どもは年齢や病状に応じて遊びやレクリエーション、教育が与えられなければならない、そのニーズを満たすためには安全な玩具の設備の整った環境の中でケアされなくてはならないと遊びの重要性を明確に打ち出している。」と述べている。

イギリスでは、プレイスペシャリストがおり、入院している子どもの遊びを専門にみる

職種として確立しており、役割の一つとして遊びに使用する玩具や遊具を選択、作製したり管理している。小児病棟勤務のナースも子どもの遊びに責任をもつように位置づけられている。日本においても入院している子どもの遊びの援助が様々な方法で行われるようになってきている。

W看護短期大学部の小児看護学実習において、看護学生は入院している子どもへ日常生活の援助の一端として遊びの援助を考え実践する機会をもつ。そうした中、学生は、遊びの媒体としての「おもちゃ」の大切さに気づき、自主的に手作りのおもちゃを作成してくる学生が年々増えてきている。学生の手作りのおもちゃは、様々なアイデアと工夫があることや回復への願い・思いがこめられていることから、患児や付き添いの母親に人気がある。中村は、「小児看護学実習準備としての演習モデルとしておもちゃの作製は、子ど

* 和歌山県立医科大学看護短期大学部

** 九州看護福祉大学 看護福祉学部 看護学科

もとのコミュニケーションや家族との関わりをより効果的なものとしていくために役立つものであると思われる」²と述べているが、実際の実習場面で手作りで作製したおもちゃがどのように効果があったかについての報告はほとんどみあたらない。

そこで、今回主に長期入院をきたした5つの事例を取り上げ、入院児とその母親に対して学生が作製したおもちゃを遊びの援助に活用した効果について検討したので報告する。

I. 研究方法

対象：平成13年5月～平成14年10月までのW病院小児病棟におけるW看護短期大学部3年生の小児看護実習において、学生が受持となった入院児に対して自主的に作成したおもちゃを活用し一緒に遊んだケース（主に長期入院児）から5ケース選んだ。

分析：①実習中教員も遊ぶ場面に参加した後、子どもの発達や治療の状況、危険防止への配慮についてアセスメントさせ、どのような遊びの援助が必要なのか検討させた。自主的に手作りのおもちゃを作製してくる学生に、材質や安全性、耐久性、材料費について適宜キーワードを与え学生と共にディスカッションし検討した。実習終了時、危険防止への配慮、子どもの経過や治療の状況に依っていたか、子供の発達にそくしたものであったか等について学生とともに評価した。

②学生の実習記録から、学生の受持ちの子どもへの手作りおもちゃに示した反応（どのように喜んだか、興味を示したか、どのような様子で使用して遊んだか）と、付き添いの母親の反応について記述したものを事例ごとに抽出し整理をした。その後、母子に与えた効果について、心理・情緒的側面、発達の側面、入院・治療環境の改善からの側面、楽しさについて2名で検討した。

倫理的配慮：5事例を受け持った学生に研究の意図を話し同意を得た。

II. 結 果

事例1.

A君、4歳、男児、神経芽細胞腫、個室入院【学生が作成したおもちゃ】布製の財布。お金を出し入れする部分がボタンで、かけ・はずし出来るように工夫している。

【材 料】丈夫な布とボタン

【効 果】個室入院で化学療法を何クールも受ける治療環境の中で、A君がお店屋さんごっこに興味をもちはじめたので、紙でお金をつくって学生と楽しく遊んでいた。学生は、A君の財布があると、物を買う時にお金を出し入れを財布からおこなうことを知る事が必要と考え、手作りの財布を創作した。なおA君がパジャマのボタンのかけ・はずしを練習していることを考慮し、財布の口をボタン製にした。K君は自分専用の財布が出来たことをとても喜び、お店屋さんごっこの楽しさに拍車がかかった。また、楽しみながら財布を通してボタンのかけ・はずしの練習を行うことができ、パジャマのボタンのかけ・はずしもいつのまにか上手に行えるようになった。そして、K君が病院内の売店にいけるようになったとき、学生が作成した財布に本物のお金をいれて、買い物に出かけるようになった。入院によって阻害された社会的経験不足をこの財布をもちいて遊ぶことで、お金の概念や売る人と買う人がいること等、社会生活に必要な経験を入院により制限された環境のなかでも遊びの工夫で補うことができた。K君の母親も学生のアイディアに感心し、転院の際もその財布を大切にもっていった。後日「前の入院していた病院で、楽しく過ごすことが出来たのは、学生さんや先生（教員）のおかげです。ありがとうございました。」と御礼

のハガキをいただいた。

事例 2.

B 君、7 歳、男児、外傷性腓損傷、個室入院
【学生が作成したおもちゃ】 ひらがなが、勉強できるパズル

【材 料】 画用紙と色鉛筆、マジック

【効 果】 自転車から転んで腓損傷をきたし、飲食制限のあるなか院内学級でひらがなを勉強している子どもを受け持った。個室入院で食事などの厳しい制限のあるなかでの学習は、B 君にとって大きな負担になっていた。そこで学生は、病室でも楽しく勉強でき学習効果も期待できるような勉強パズルを作成した。まず、ひらがなカード（写真 1）に書いてある言葉を手にとって声を出して読み、次にそのカードに当てはまる絵のところにカードを置いていく。カードを全部あてはめるとパズル全体がアンパンマンの絵になる（写真 2）という二重の楽しさがあった。B 君は、病室に響き渡るような大きな声でカードに書いてある文字を読み真剣な目で絵を探していた。教科書などの本読みは嫌がるけれど、このパズルは大好きで何回も繰り返して使用した。なお B 君が一人でもくもくとパズルをするのではなく、学生や付き添いのお母さんと一緒に実施したり、パズルがスムーズにいった時は「えらいね」とほめたりすることで、一層はりきり積極的な取り組みがみられた。母親から「学業の遅れへの不安を感じていたが、子どもの治療に対する苦痛等から病室での学習はストレスになると考えていた。学生が入院していても楽しく遊びながら勉強する方法を考えてくれてうれしかった」という声が聞かれた。退院時、勉強パズルは家にもって帰った。学生は、子どもが文字を習うペースにあわせて遊びと学習を合体させて、楽しく学ぶ事ができたと評価し、慣れてくると絵

と文字の組み合わせを随時作り直していく必要があることを課題としてあげていた。

事例 3.

C 君、8 ヶ月、男児、純型肺動脈閉鎖
【学生が作成したおもちゃ】 タオルでつくったゾウのぬいぐるみ

【材 料】 バスタオル、フェイスタオル（新しくても古くてもよい清潔なもの）、ボタン

【効 果】 純型肺動脈閉鎖で B-T シャント等の手術を繰り返し実施しているが回復せず、人工呼吸器装着している 8 ヶ月の児に学生はゾウのぬいぐるみを作成した。（写真 3）全体は水色のバスタオルで、ゾウの耳と手足の先にフェイスタオルのストライプの柄を生かし、目の部分はボタン（家であまったもの）を使用した。人工呼吸器管理下の C 君が触った感触を味わえるように綿をゆるめに入れ、軽く、形も柔軟に変化できるようにした。また聴覚への刺激も考え、ゾウの両手足に鈴をいれ、触ったら音が鳴るように工夫した。C 君は、水色の大きなゾウを触ったり、目で追ったり、笑ったり、いろんな反応を示し、大きな刺激となった。また学生が作成したゾウのぬいぐるみが非常にかわいかったので、そばについて見ているだけしか出来なかった母親もそれを使ってあやしたりすることが出来た。母親から「子どもがぬいぐるみに反応する姿がうれしかった。実習で忙しい中、自分の子どものために作ってくれた学生さんの心がうれしかった」という声が聞かれた。なお C 君のそばに置くことで、病棟ナースもゾウのぬいぐるみを使って声かけをしたり遊んだりする機会が多くなった。緊迫した観察室のベッドサイドに、既成のぬいぐるみではなく手作りのぬいぐるみをおくことで、人のぬくもりや柔らかい雰囲気をかもしだし、母親の緊張も軽減し、子どもと遊んだり接する

時のゆとりへとつながった。

事例4.

Dちゃん、4歳、女兒、川崎病後の冠動脈瘤
【学生が作成したおもちゃ】ペットボトルの
お散歩犬、ただし発案はDちゃんの母

【材 料】ペットボトル (500ml 以下のもの)、
足にする滑車 (ホームセンターで、50円くら
い) 心電図の電極リード線、シール、色画用紙
【効 果】川崎病により巨大冠動脈瘤を合併
し、長期入院 (4年) となったDちゃんを受
け持った。母親も長い付き添い生活である。
母親の発案で、学生が母親と一緒に「お散歩
犬」のおもちゃ (写真4) を作成した。ペッ
トボトルを犬の体にして、足は滑車を4つづ
けて動くように工夫した。画用紙やシールで
耳や目、尻尾をとりつけた。散歩用の綱はも
う使用しない赤青黄の心電図の電極リード線
を利用した。ペットボトルや不要となったリ
ード線など廃材を利用することもできた。走
りまわってスピードがでると危ないので危険
防止のため軽度の衝撃でも滑車がはずれるよ
うに接着をゆるくした。子どもはこのペッ
トボトルの犬をひいて、病棟内をはしゃぎな
がら走り回らわった。また、お散歩の様子を他
の病室に入院している子どもに見せたりする
ことで、他の患児との交流をもつ機会ともな
った。そして、他の入院患児の母親、ナース
やドクターからも「お散歩してるの?」と声
をかけられることも多くなり、会話や交流を
もつ機会が多くなった。ベッド周辺での遊び
が限られている状況の中、この「お散歩犬」
で病棟内を散歩することによってストレス発
散もできた。母親より「自分が発案したおも
ちゃを学生さんと一緒に作る時間が楽しかつ
た。長い付き添い生活のなかで気分転換がで
きた。自分達が作成したおもちゃで自分の子
どもや他の子どもが楽しそうに交流している

姿を見ることがとてもうれしい」という声が
聞かれた。母親と一緒におもちゃを作成する
ことは、母親にとってプロセスそのものを楽
しめるし、母親は自分が作ったおもちゃで子
供が遊んでいる姿をみることで、癒しや喜び
につながっていることが伺えた。

事例5.

Eちゃん、1歳8ヵ月、女兒、ゴーシェ病
【学生が作成したおもちゃ】アンパンマンの
聴診器と布製の絵本

【材 料】布、フェルト、マジックテープ、綿
【効 果】学生は、ゴーシェ病という聞きな
れない病気で入院してきたEちゃんを受け持
た。初めての入院、初めての注射、初めての
バイタルサイン測定などEちゃんにとっては
恐怖そのものであった。そして、ナースをみ
ただけで激しく泣き、バイタルサイン測定も
非常に困難であった。学生はその場面をみて、
次の日すぐにアンパンマン付きの聴診器 (写
真5) を作成してきた。Eちゃんはアンパン
マンが大好きということを上手く利用して、
「Eちゃん、アンパンマンだよ。アンパンマ
ンがもしもしするよ。」とアンパンマンの部
分をEちゃんに見せて、触れさせながら聴診
すると、Eちゃんは泣かずにおとなしく聴診
させてくれた。それ以後、泣かずにバイタル
測定を学生に実施させた。検査や処置の恐怖
も遊びを取り入れた工夫によって最小限にす
ることができた。それで、次に布製の絵本を
作成してきた。これもEちゃんの好きなアン
パンマンのキャラクターを、マジックテープ
でつけたりとったり出来るように工夫されて
いる。他にもおもちゃはたくさん持っている
のだが、マジックテープでつけたりとったり
するのが面白いのか、何回も何回も遊んでい
た。ところで、付き添いの母親は20代前半の
若い母親で、子どもがゴーシェ病ということ
を聞き難い病気というイメージをもち、今

後どうなっていくのかという不安を抱えていた。そのような状況の中、Eちゃんの笑顔を見ることがとてもうれしく、学生の子供への関わりに安心することができ、「これからも学生さんに継続して受け持ってもらいたい」という希望があった。学生は、子どもの笑顔をひきだすことが、母親への援助にもつながっていくということを学んだ。

Ⅲ. 考 察

学生が自主的に作成してきたおもちゃの中で対象に喜ばれ使用されたものは、受け持ちの子どもが十分にアセスメントできていた。そして、遊び以外にも適切なプランが立案・実施できている学生ほど正確に相手のニーズをとらえていたので、受け持ちの子どもに適したおもちゃの作成ができていた。それで、学生が受け持ちの子どもの発達や状況判断ができた上で活用していくことで、事例1のように社会的経験不足を遊びで補っていったり、事例2のように遊びの中に学習を取り入れていくことで、楽しみながら学習をおこなうことができ、自然な形での学習の動機づけとなり、発達を促すことへとつながっていていることが伺える。

岡本は、「健康レベルを発達段階の理解だけでは、具体的な遊びの援助にはつながらない。さまざまな状況下に置かれている子どもに、どのような行動を起こさせてはならないか、逆にどのような行動ならば支障がないか、さらにその子どもが好み、求めている遊びと融合させていく判断が要求される。」³⁾と述べている。受け持ちの子どもの発達はもちろんのこと、その子どもの置かれている状況を十分にアセスメントし、パターン化した遊びではなく、個々によって求められている、あるいは看護者側から必要だと思われる遊びを提供していく事が重要であろう。学生は、そのよう

な個別性にとんだ遊びの援助を立案した時に、既存のおもちゃでは、個人に応じた工夫ができにくいと判断したため自分自身の自由な発想でおもちゃを作成するようになってきている。学生が教員の指示とかではなく、受け持ちの子どもを真剣に考えて、いろいろな工夫でおもちゃを作って、それを利用しながら真意に看護を実践したことが、対象にも好影響を与えていると推察される。

ところで事例4の場合、入院により心身ともに制限を強いられている中、手作りおもちゃを病室外にもちだすことによって、人との交流をひろげ、おもちゃを媒体としてコミュニケーションを促進した。この時も誰もが目にするような既成のポピュラーなおもちゃではなく、手作りで廃材を工夫した、かわいくて珍しいオリジナリティのあるおもちゃであったからこそ、人の関心をひきつけることができたと考える。手作りおもちゃの話題から、親近感がわき、入院中の子どもと子どもが友達になり、親同士も話がしやすくなるなど、人と人との関係作りにも役に立つ事ができた。また、発案した母親の意向を大切に、作成過程から学生と一緒に協同してやっていくことで、たとえ病院という環境のなかであっても母親の能動的な子どもに対する保育への力をひきだし、母親としての情緒的な満足感をえることができたのではないかと考える。

事例3の場合、母親は緊迫した回復室のなかで人工呼吸器をつけた子供への治療や回復へ大きな不安をいだき、生後8ヵ月の子どもへどのように対応すればよいのか戸惑い、わが子に手がだせず緊張の中にあった。ゾウのぬいぐるみは、リンリンと鈴の音が響きかわいく見るものをホッとさせるものであった。母親は、わが子がこのゾウのぬいぐるみに反応し、機嫌良く過ごしている姿をみて癒され

ている。入院した子どもをかかえた母親は、子どもが少しでも楽しく機嫌良く過ごすにはどうしたら良いのだろうかと不安をいだいている現状がある。母親にとってこのゾウのぬいぐるみは、人工呼吸管理下にあってもわが子をあやしたり、一緒に遊んであげられる気持ちのゆとりを生みだすきっかけとなった。また、どのような状況下であろうと子どもの発達の可能性をひきだすものとなったと考える。

事例5の場合も、入院したばかりで慣れない治療環境に母子ともに大きなストレス下におかれていたことが推察される。アンパンマンつきの聴診器や布製の絵本は、治療の媒体となり、母子の緊張を和らげ情緒の安定をもひきだすものとなっている。この場面で手作りの聴診器や絵本は、プリパレーションの媒体になることもできた。

及川は、「プリパレーションとは、通常心理的準備として訳され、子どもが病気や入院によって引き起こされる様々な心理的混乱に対して準備や配慮をすることにより、その影響を避けたり和らげ、子どもの対処能力を引き出すような環境を整えることを意味している。」⁴と述べている。そのプリパレーションの媒体として、絵本や人形を活用することが多いのだが、そういう物はほとんど売られていないので、手作りで対象にあった物を作製することがほとんどである。学生は、作製してきたおもちゃがプリパレーションへの工夫にもつながることを学ぶことができ、臨床実習への学習効果へもつながっていた。

以上の各事例から、学生の手作りおもちゃは、入院している子ども達にいろいろな快感を与える事ができたと考える。また、受持ちの子どもだけの遊びの援助にとどまらず、付き添いの母親の気分転換や心理的援助を図ることができたと考える。学生の手作りのおも

ちゃを通しての関わりは、入院や治療に苦痛をみせている子どもから笑顔を引き出すことができた。その結果、長い付き添い生活の中で心理的負担（緊張・不安・疲労等）を抱えた母親にとっても、学生という第3者をまじえて楽しく遊ぶ事が、母親自身の楽しみにもなり、情緒的な支援につながったのではないかということを今回の事例をとおして実感した。

なお、学生が自主的に作成してきたおもちゃの母子に与える影響について、今回5事例しか検討していないが、小児看護実習で学生は、遊びの媒体として「おもちゃ」の大切さに気づき、自主的に手作りのおもちゃを作成してくる学生が年々増えてきている。学生の手作りのおもちゃは、様々なアイディアや工夫があることから結果的に患児や付き添いの母親に人気があった。遊びが子どもの生活そのものであるとすれば、それを支援する用具としての「おもちゃづくり」は、生活支援用具の作製であると考ええる。用具（おもちゃ）の工夫や導入によって、ユーザーである子どもの生活を楽しくしたり、入院中のケアや処置が受けやすくなる等のメリットがだせ、ストレスの少なくなるような環境改善にもつながっていったのではないかということを実感している。

最後に、学生の手作りおもちゃの特徴は、色が明るくきれいで、絵が上手であり、100円均一の品物やペットボトルなど廃材になるものを上手に利用しており、経済的に効率が良く、手作りの暖かさや面白味がある。おもちゃを作製した思考過程と作業過程は、治療用具やリハビリ用具の工夫、プリパレーションの際に必要なものも手作りで工夫できること、また、小児病院は赤字採算部門であるので、安い予算や物の工夫で病棟や病室の改善ができることに応用できる。また、地域での

子育て支援教室や療養事業でも予算の付きにくいおもちゃを手作りで工夫できることなどを教員が提示し、学生とデイスカッションした結果、学生は様々な場面で作製したおもちゃが役立つことや、いろんな応用が利くことを知ることができ、看護の視点への広がりにも効果があったと考える。

今後も学生が生き生きと自主的に取り組める様な小児看護実習に向けて努力していきたいと考えている。

IV. 結語

今回、学生の手作りのおもちゃを活用し援助した主に長期入院をきたした5つの事例を取り上げ、その援助効果について検討した結果は以下の通りである。①子どもや母親に喜ばれ情緒的な安定をもたらすことができる。②母親のゆとりにつながり子供と入院生活を楽しく過ごすことができる。③子どもの社会経験や社会との接触をもつ機会となっている。④学習の動機づけになる。⑤病院体験のこわさを軽減できる。⑥子ども同士や母親間の交流の機会になる。

引用文献

1. 鈴木敦子：入院している子どもの遊びに対するイギリスにおける考え方とその現状ー

「遊びを奪われた子どもは、生活や自由な活動を閉ざされた囚人のようなものである」

Susan Harvey ー, 小児看護 22(4), 1999, 440-441

2. 中村雅子 他：小児看護実習モデル 実習準備としての演習モデル, Quality Nursing vol.8 no.9 2002, 802-803

3. 岡本恵里：健康レベルに応じた遊びへの援助ポイント, 小児看護 22(4), 1999, 450-454

4. 及川郁子：プリパレーションはなぜ必要か, 小児看護 25(2), 2000, 189

参考文献

1. D.W.ウニコット著 猪股丈二訳：子どもはなぜ遊ぶの, 星和書店, 1987

2. 西野泰広編著：乳幼児教育心理学, 福村出版, 1985

3. J.ニューソン E.ニューソン著 三輪弘道他訳：おもちゃと遊具の心理学, 黎明書房, 1988

4. リチャード・H・トムソン、ジーン・スタンフォード著 野村みどり監訳：病院におけるチャイルドライフ 子どもの遊びを支える“遊び”のプログラム, 中央法規, 2000

写真 1

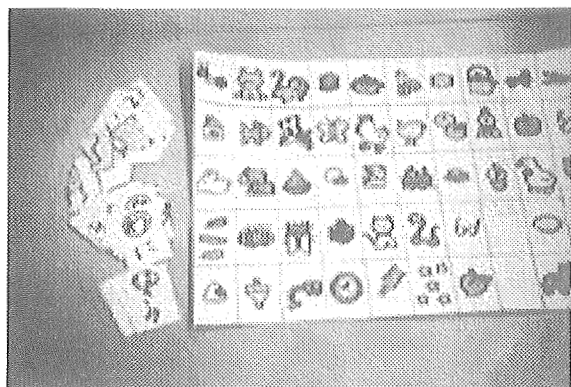


写真 2

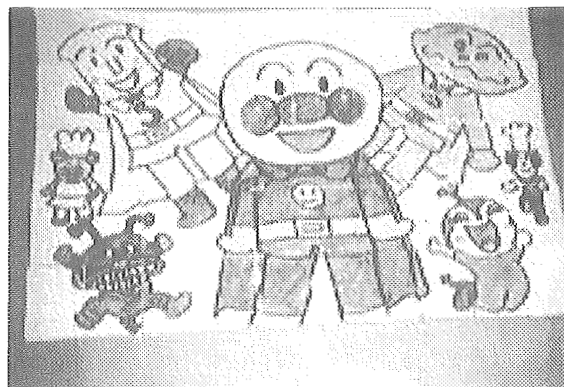


写真 3

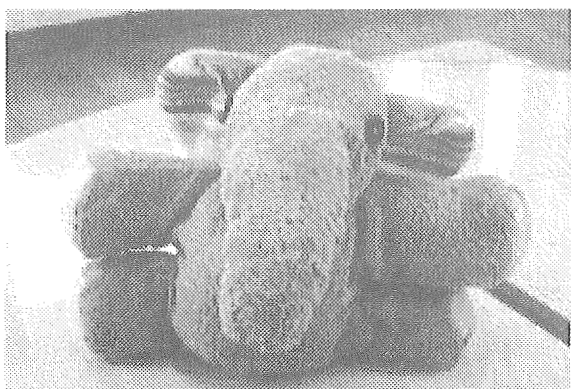


写真 4

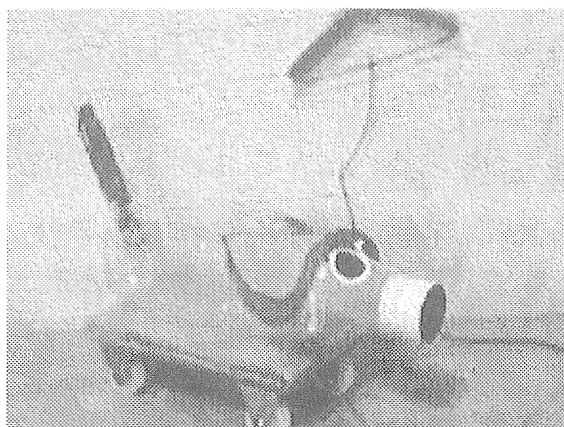
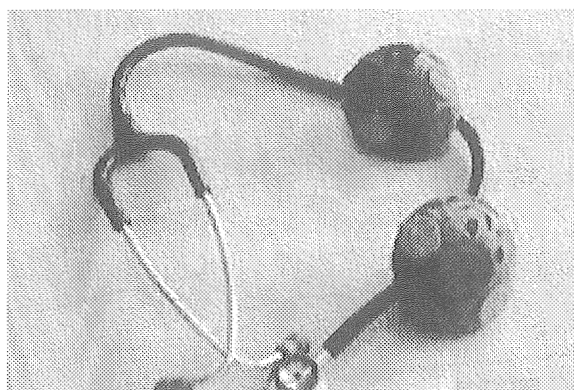


写真 5



**A study on how effective of hand-made toys are
on the child inpatients and their mothers
-Through assisting the situation of “playing”
in the training of nursing infants-**

Takami Inotani Yasuyo Masuda

Abstract

This is a study on the resulting effects of the hand-made toys which were given to the infant inpatients whom the third year students of “W” Nursing College were in charge of and the toys made by students. 5 cases (mainly long term inpatients) were particularly studied focusing on assisting to plan by the students in a training course in the children's ward of the “W” hospital and the effect in assistance was discussed. Consequently, we found that the practical usage of handmade toys brought the emotional stability towards the relationship between mother and child and made their hospital life more pleasant and easier promoting to encourage the communication amongst the infant-inpatients as well as their mothers. And moreover, it came to light that the usage of handmade toys helped to lessen children's fear and their will to study and developed the feeling to contact and experience the opportunities of social life.

Key words : handmake toys a child in charge of student mothers
training in nursing infant